

アメリカのカレッジ及び大学における Work-Based Learning 経験の活用 議論とケーススタディ

Chris Zirkle, Ph.D¹・菊池美由紀訳²

大学の教育経験の一環として Work-Based Learning (以下 WBL) 経験を活用することは、過去 20 年アメリカにおいて増えている。大学教職員は、学生が専攻分野に関連づいた仕事を行うことで、対価を得ながらキャリアトレーニングを受けることになる教育戦略としての WBL の価値に潜在的に気付いている。アメリカでは学生の学術的訓練を強化するために、政府や企業、産業界や福祉の分野で職業経験を提供する長い歴史があるが、大学内に普及したのは、ここ最近のことである。本稿では WBL 経験の様々なタイプにおける議論を提供し、以下について検証する。

- ・ アメリカのカレッジと大学における WBL の活用に関する歴史の概要
- ・ 労働環境を使った様々な教育戦略に関する議論
- ・ WBE の利点と強み
- ・ WBE 関連の課題と懸念
- ・ アメリカの 2 大学 (Cincinnati 大学、Drexel 大学) におけるコーラブ教育の個別的検討
- ・ アメリカの大学 (Ohio 州立大学) における WBE の事例
- ・ まとめ

アメリカにおける WBE 活用の歴史概要

生産労働を大学の教育経験に組み込むという考え方には、Cincinnati 大学の Herman Schneider 博士によって高い評価を得た。1906 年に Schneider 工学博士は、2 つの問題を解決するために最初の「コーラブ教育」を策定した；大学在学中の就労に対する需要と要求、そして教室や実習授業では教えられないことを補う実践的なカリキュラムのニーズである。Schneider プログラムの受講学生は二つのグループに分けられた。一つ目のグループが 1 週間キャンパス内で勉強している間に、他方のグループが近所の企業でエンジニアリングに関

係する仕事を行う。そして 1 週間後に学生は場所を交換する。ほかの大学がこれに続き、1919 年までには Pittsburgh 大学や、Georgia 工科大学、Marquette 大学を含む他の大学もこのようなコーラブ教育プログラムを発展させた (Knowles, 1978)。これらのプログラムは工学領域において行われた。1921 年には Antioch カレッジがリベラルアーツ大学において最初にプログラムを導入した。

工学領域におけるコーラブ教育の焦点化は 1920 年代から 1930 年代まで続き、第二次大戦後は復員軍人の教育機会の探索と、技術分野におけるスペシャリスト需要の上昇に伴って普及した。しかし民間企業における労働組合が、学校と雇用主間の関係をより難しくする労働規制を作ったために、1940 年代と 1950 年代初期にこの成長は一部失速した。それは work-based プログラムの学生が組合労働者から仕事を取り上げるのではないか、という不安感によるものである (Knowles, 1978)。

Knowles (1978) によると、WBL の強化は、1957 年に自動車製造業者である General Motors が、全米コーラブ協会 (National Commission on Cooperative Education) が設立される上で関与し、支援したことで転機を迎える。この協会は最終的には、1965 年の修正高等教育法と、1963 年の職業教育法にコーラブ教育という専門用語を普及させるきっかけとなった。1963 年にはコーラブ教育協会が設立され、1971 年には最初の全米コーラブ教育協議会が開かれた。1985 年のコーラブ教育のための全国的なキャンペーン (3 千万ドル) は、コーラブ教育を雇用主と同様に、大学やカレッジ関係者にとっての最重要事項とした (CEIA, 2016)。1998 年、コーラブ教育協会は、WBL 戰略の一つとして internship の影響力を認識するように、コーラブ教育・internship 協会に改名した。

コーラブ教育と internship の影響が過去数十年にわたって発展している間に、WBL の他の形も発展し、広がっている。job-shadowing, work-study や

1 オハイオ州立大学教育・人間環境学部

2 名古屋大学大学院生

apprenticeship もまた大学のカリキュラムの中での方法を見つけています。これらについては次の段落で述べ、定義する。

労働環境を使った様々な学習方法に関する議論

現在、学生に職場体験を提供する様々な教育方法がある。work observation とは学生が仕事の過程を見るが、仕事自体には参加しない (Husted, Mason and Adams, 2003)。この経験は無給で、通常は学内科目である。work-study は学生に対する有給の経験を提供する。これは学費や生活費を払うための一時的な財政的支援として、大学の学部の中で広く用いられている。またこの経験は正課目やプログラムに関係することもあれば、そうでないこともある。job-shadowing とは、実際に働いている人の影のように付いて歩くことで、仕事について学ぶ仕事経験のオプションである。job-shadowing はしばしば externship とも呼ばれる。この経験は学生が興味のある職業領域の職場に、一時的に無給で触れる経験である。apprenticeship とは、OJT と関連する教育の組み合わせで、高度な技術を必要とする仕事において、実践と理論を学ぶ。apprenticeship は個々の経営者、共同経営者や労働グループ、もしくは労働組合がスポンサーになっている (United States Department of Labor, 2016)。internship とは、教室で学ぶ知識や理論と、職場における実践的で技能開発的な学びを統合した経験学習の一つである。internship は学生に価値ある経験と、将来のキャリアパスとして考えている職業領域へのつながりを作る機会を提供し、雇用主を指導し、能力を評価する機会を提供する (National Association of Colleges and Employers, 2016)。最後に cooperative education とは、教室を基礎とした教育と、実践的な仕事経験とを組み合わせる構造化された方法である。cooperative education の経験、一般的には 'CO-OP' 教育として知られているものは、構造化された仕事経験に対して単位認定を行う。コーオプ経験は、就労と学校をフルタイム（週 40 時間）で交互に行う方法と、同じ期間内にパートタイム（週 20 時間）で就労と学校を組み合わせて行う方法がある。コーオプ経験は有給であり、学生と同じキャリアパスを進んだ現場の専門家によって監督されており、学生は 1 つ以上（2 つもしくはそれ以上）の責任ある発展的なレベルの課題を成し遂げる (cooperative education・internship 協会, 2016)。

WBE の利点と強み

WBE をカレッジや大学のカリキュラムの中に組み込むことの利点や強みは、数多く立証されている。これら利点や強みは主に学生に関連するものだが、教育機関や協力している雇用主にとっても良い結果をもたらす。

第一に、学生側から見ると、WBE は彼 / 彼女の知識を「現実の」仕事上の状況に応用できるということである。これは理論上の世界と現実の仕事世界を繋ぐ架け橋となり、学ぶ意味を提供する。また、学生は経験によって提供された特定の仕事の中で、自分の興味や適性を試す機会を得る。職場ではフォーマルな場において、年配の大人と交流するという今までに経験したことのない機会を得ることができる。最後に、これら WBE の多くは有給なので、学生は生活費や学費を払う資金を得る機会となる。

教育機関には、学生に提供できない労働環境への接近や、設備を提供できるという利点がある。大学は学生の就職仲介を超えて、研究や発展の機会や共同プロジェクトへの機会となりうる企業との関係も築くことができる。学生と雇用主の協力は、教員にも同じように広がり、教育者が装備や実践、動向において最新の専門性に精通し続けるために、その分野における「最新で最もすばらしい」ものを見る機会となりうる。

雇用主にも利点がある。たいていの場合、学生にはやる気があるし、良い成果を雇用主に見られることは、組織全体のウェルビーイングに役立つ。学生は古い組織の問題に新しい視点をもたらす。雇用の視点から見ると、彼らは新しい従業員候補である学生に、雇用適合性があるかどうかを、OJT を通して点検することができる。学生の多くは卒業後すぐに組織に戻ってきて、すぐに働く従業員になっている。企業は教育機関との関係を築くことで、コミュニティ全体から良い印象を得ることができる。教育機関とのパートナーシップの継続は、雇用主にとって継続した利益となる。

WBE に関する課題と懸念

WBL 経験の活用に関する懸念は、1920 年代初期にさかのぼる。ある大学教員は WBL の活用に反対した。なぜならば職場は大学教育にとって、特にリベラルアーツ教育に注目して、全く機能をなさないと考えたからである。近年の懸念は、一般的に学生の職場や雇用主との関係性に関するものである。

学生が WBE のための要件を満たし、実習を望むとき、最初に取り組むべきことは実習現場の確保である。学

生、大学のどちらが実習先を見つける責任を負うのか。どちらにせよ実習は適切で、できれば学生のアカデミックプログラムの延長上にあり、業務や課題は価値あるものであるべきである。

学生実習に関して最近アメリカであがったひとつの事例では、仕事上の遂行に対して「有給か無給か」ということである。近年、若者に対する仕事不足は無給 internship の上昇につながっており、連邦及び州取締官は多くの雇用主が違法に internship を無給労働として使っていることを懸念している (Greenhouse,2010)。この状況はアメリカ労働局が、学生に無給 internship もしくは cooperative education を行う際の 6 つの基準を定義するまでに進展した。無給 internship を行うときには 6 つの基準が適応されなければならない。

1. 従業員の実際の設備操作を含むものであっても、この経験は教育環境下で行われるトレーニングに適したものである。
2. この経験はインターンの効果につながるものである。
3. 学生は正規従業員に代わるものではなく、現存するスタッフの緻密な管理のもとで行われる仕事である。
4. トレーニングを提供する雇用主は、学生の活動からすぐに利益を得るわけではない。そして時折、学生の操作は邪魔になることもある。
5. 学生は必ずしも internship の結果としてその仕事に就く必要はない。
6. 雇用主と学生は、学生が internship に費やした時間に対する賃金を得るわけではないことを理解している (アメリカ労働局, 2010)。

WBL 経験における更なる課題は、学生を派遣するために十分な企業や組織の数を確保することというシンプルな難しさである。共通の理由としては「私たちに

は学生とともに働く十分な時間がない」。そして彼らのために時間を費やすことは、企業又は組織としての業務責任を放棄することになる。大企業や大きな組織ほど、より多くの財政や人材資本を学生のメンタリングに費やすことができるので、参加するようだが、それがアメリカに蔓延している問題なのである。これら経験の価値を誰もが理解しているものの、それを喜んで引き受ける者はしばしば不足している。

アメリカの 2 大学における cooperative education の具体的な調査 (Cincinnati 大学と Drexel 大学)

Cincinnati 大学

オハイオ州シンシナティにある Cincinnati 大学は、WBL の特殊形である cooperative education の長い歴史を有している。その歴史は 1906 年にハーマン博士が最初の「cooperative education」を作ったときまでさかのぼる。これは学生に「現実の世界」での経験と、生活費と学費をまかなうための資金を得る機会を提供する。Cincinnati 大学の cooperative education は今日まで続いている、cooperative education の機会を以下の学部に提供している。

- ・ビジネス学部
- ・デザイン、建築、アート・プランニング学部
- ・工学部・応用理学部

2012 年に大学は、どのくらいの学生がプログラムに参加したか、どの企業がそれを行ったか、その他の情報について、cooperative education に関する包括的な調査を実施した。表 1 は 2010 年、2011 年の 2 年の間に、5000 人以上の学生が各年にコープ教育経験を行ったことを示している。

cooperative education プログラムには雇用主の意義深いサポートもある。このネットワークにより、コー

表 1 WBL 経験者数

	コーオプ実習	experiential explorations プログラム	学習経験者数 合計
デザイン・建築・アート・プランニング	1607	126	1733
工学及び応用科学、工学諸領域	1991	20	2011
工学及び応用科学、技術諸領域	729	20	749
工学及び応用科学、全体	2720	40	2760
Carl H.Lindner ビジネス	702	12	714
2010 年度合計	5029	178	5207
デザイン・建築・アート・プランニング	1706	74	1780
工学及び応用科学、工学諸領域	2141	10	2151
工学及び応用科学、技術諸領域	799	14	813
工学及び応用科学、全体	2940	34	2974
Carl H.Lindner ビジネス	851	5	856
2011 年度合計	5497	103	5600

オプ期間中に大学は質の高い経験を学生に提供することが出来る。これらの点により、大学は cooperative education 経験に学生を配置するだけではなく、共同研究や人事交流を行うことも可能にしている。表2は、cooperative education 実施雇用主トップ10と、経験した学生の数である。

cooperative education 実習はアメリカのいたるところで実施され、他の国でも行われている。表3、表4はどの州や国が cooperative education 実習を受け入れているかを説明したものである。

これらすべての取り組みは、一つの教育部門を通じてコーディネートされている。大学にはキャリア開発センター(CDC)と専門実習と経験学習プログラムを一つにまとめる「ワンストップ」キャリア教育部門があり(ProPEL)、経験学習の機会と彼らの専門研究を一体化することによって、学生にキャリアパスウェイを提供している。

プログラムのウェブサイト：<http://www.uc.edu/propractice.html>

Drexel University

Drexel 大学はフィラデルフィア州に3つ、カリフォルニア州サクラメントに1つのキャンパスを持つ私立の研究大学である。1891年に投資家で慈善家として名

高い Anthony J.Drexel によって設立された。この大学は早い時期に cooperative education プログラムの提供を始めた大学の一つであり、1919年に最初のプログラムを実施している。

Drexel 大学における cooperative education プログラムは、学生に専門職経験を提供するプログラムであり、社会人の仲間入りをする前にキャリアを探索する機会を提供する。Drexel 大学の学生は、最大3つまで異なる専門キャリアの cooperative education に参加することが出来る。大学は35州、45の海外地域において、1700以上の雇用主との間にネットワークを持っている。2014年の、cooperative education の実施地域は以下のとおりである。

Drexel は素晴らしい雇用主ネットワークを持っており、大学は学生を評価の高い企業に配置することが出来る。2014年、学生は、グーグル、ボーイング、アマゾン、デュポン、JPモルガン・チェース、ジョンソン・アンド・ジョンソン、メルク、NBCユニバーサルのような企業に配置された。

この幅広いネットワークの学生に対する利益は明らかである—Drexel は産業界のリーダーと学生をつなぎ、学生は cooperative education での経験を教室に持ち帰ってくる。それに加えて、Drexel 大学の卒業生はすでに専門職ネットワークを構築しており、大体はほかの学校の卒業生よりも高い初任給を得ている。

表2 コーオプ学生を採用するトップ10企業

企業	cooperative education 実習学生数
General Electric Aviation	280
University of Cincinnati	181
Duke Energy	159
Libby Perszyk Kathman (LPK)	65
Kroger Company	56
Procter and Gamble	56
General Cable Corporation	44
Great American Insurance Group	44
Kinetic Vision	43
Wright Patterson Air Force Base	43

表3 コーオプ実習トップ州

順位	州	実習学生数
1	オハイオ州	3707
2	ケンタッキー州	268
3	ニューヨーク州	236
4	カリフォルニア州	208
5	テキサス州	117
6	イリノイ州	108
7	インディアナ州	95
8	ジョージア州	86
9	マサチューセッツ州	83
10	フロリダ州	61
11	ペンシルバニア州	58

表4 cooperative education 実施地域

場所	学生数
ペンシルバニア州	5,051
ニューヨーク州	229
ニュージャージー州	114
カリフォルニア州	93
メリーランド州	70
マサチューセッツ州	21
その他の州	108
その他の国（ブラジル、中国、ギリシア、アイルランド、インド、日本）	228

オハイオ州立大学におけるケーススタディ

オハイオ州立大学は、アメリカのオハイオ州コロンバスにある公立で、州によってサポートされている研究大学である。1870年にオハイオ農業・機械カレッジとして設立された。新しいカレッジは1862年7月2日にリンカーン大統領によって署名された公有地付与法によって可能となった。この法律は高等教育に対する国家のアプローチに革命をもたらし、すべての高校卒業者にとって大学の学位を実現可能なものにした。(Ohio State University, 2016)。おおよそ64,000人の学生（うち50,000人強が学部生）がいる。大学は18学部と5つの学校における200以上の学部専攻と262の大学院分野に対して、12,000以上の講座を提供している。アメリカの大学をランク付けしているUSニュースやワールドレポートは、オハイオ州立大学を全米公的機関のトップ25位に、オハイオ州の公立大学の中ではナンバー1にランク付けし続けている。

大学は農業、ビジネス、工学、教育、法律、医学を含む職業領域において幅広く多様な独自性を整えている。オハイオ州立大学はNorth Central Association of Colleges and Schools(NCA)の高等教育委員会(HLC)によって認証されている。オハイオ州立大学はオハイオ州コロンバスに最初のキャンパスがあり、5つの「地方」キャンパスがLima, Mansfield, Marion, Newark, とWoosterにある。大学が管理している建物の数は1300を超える。

オハイオ州立大学の1764エーカー(7.14m²)に及ぶメインキャンパスは、コロンバス中心街のおおよそ4キロ北にある。コロンバスはオハイオ州の州都である。大学は33,000人以上の学生・院生と、おおよそ3000人の教員を雇用し、年間人件費は24億ドル以上に及ぶ。年間支出は55億ドル以上に及ぶ。

学生へのキャリアサービス

オハイオ州立大学では、以前は就職支援とWBEは別々の場所で行われていた。Buckeyeキャリアオフィ

ス（Buckeye = オハイオ州の州木トチノキ、オハイオ州人を指す）は、一か所にまとめられた場所で、すべての学生と雇用主に対してより統合されたキャリアサービスを提供するために、2012年秋に立ち上げられた。しかしながら一般的に、オハイオ州立大学におけるキャリアサービスは分散型であり、キャリアサービスの大半は学部によって提供される。Buckeyeキャリアは、大学のキャリアに関するすべての支援において、キャリア支援専門家のサポートや資源を用いて、学生が必要なサポートを見つけられるよう支援する。そしてそれは専攻選びからキャリアを始めるまでに及ぶ。Buckeyeキャリアネットワークは、学生の売り込みのために、学生と雇用主とをつなぐオハイオ州立大学の幅広いオンライン情報源である。Buckeyeキャリアのウェブサイトは <http://careers.osu.edu/> である。

学部や学科のいくつかは独自のキャリアサービスオフィスを持っており、特定の学術領域における学生を支援している。これらのオフィスは、企業等とのパートナーシップの構築、応募機会やその他様々な活動において、基本的にBuckeyeキャリアオフィスと連携している。各キャリアサービスオフィスは以下のとおりである：

- ・人文科学キャリアサービス
- ・体育キャリアサービス
- ・教育・人類学キャリアサービス
- ・工学キャリアサービス
- ・キャリアマネジメント・フィッシャー*・オフィス【*寄付者名】
- ・食品、農業、環境科学キャリアサービス
- ・法科キャリアサービス
- ・薬学キャリアサービス
- ・キャリア公務サービス
- ・公衆衛生キャリアサービス
- ・社会福祉キャリアサービス
- ・獣医学キャリアサービス
- ・卒業生キャリアマネジメント

その他の専門部署として、キャリアカウンセリング・サポートサービスと呼ばれるオハイオ州立大学学生キャリアカウンセリングセンターがある。彼らはオハイオ州立大学の学生すべてに対して、個別のキャリアカウンセリング、アセスメント、専門的能力の開発、大学院準備を行い、キャリア発達に尽くす。彼らはまた特別トレーニングやワークショップも実施できる。加えてもう一つのオフィス、卒業生キャリアマネジメントオフィスは、オハイオ州立大学の卒業生と、卒業生を採用したい雇用主の両方を支援することができる。

cooperative education と internship プログラム

オハイオ州立大学では、18 の学部すべてが WBE、主

に cooperative education 経験と internship を提供している。学部の中には、個々の学科や課程も学部生、院生、社会人学生に cooperative education と internship の両方を提供している。これらのほとんどが 3 年もしくは 4 年次の学部生もしくは院生に提供されている一方で、大学は近年新たに 2 年次の学生に対しても 2 年次進級プログラム、もしくは STEP と呼ばれるプログラムを始めており、学生の成功と発達を重視し、個人の興味やニーズに応じた活動の機会を提供している。職場における internship で強調されることの一つに、学生が応募し、internship を始めると 2000 ドルの基金を受け取れることである。WBE 経験を提供する各教育プログラム領域に敬意を表して、全体目録を次に掲載する。

表 5 cooperative education・internship を提供しているアカデミックプログラム

農業コミュニケーション	農業経済
農業システムマネジメント	動物科学
人類学	芸術
芸術教育	芸術科学（学部）
大気科学	生物学
バイオテクノロジー	経営管理学
ビジネスと人材	ビジネステクノロジー
都市部と地方計画	コミュニケーション
コミュニケーションリーダーシップ	比較研究
消費者システム	消費者科学
コンピューター科学工学	カウンセラー教育
作物学	ダンス
歯科衛生	デザイン
身体障碍学	地球科学
経済	教育学
教育教授と学習	教育・人類生態学（学部）
英語	工学（学部）
工学技術	昆虫学
環境科学	食物科学
映像学	地理学
ドイツ語	歴史
芸術史	園芸技術
ユダヤ教学	運動（生理）学
景観設計	言語学
数学	食肉科学
音楽	神経科学
看護	植物病理学
植物健康管理	政治学
心理学	教育心理学
公務	公衆衛生
再生可能エネルギー	ロシア語
スラブ語	社会学
演劇	労働職開発と教育

一般的に、学生は cooperative education や internship 経験のための特定のコースに登録する。大学はこれら経験を設定するために、特別なコースナンバーを確保しておく。例えば、internship に参加する学部生のためのコースナンバーは 3191（3年生用）もしくは 4191（4年生向けで、COMM4191 や ECON4191 のように学科の接頭辞をつける）などである。

WBE の登録には教務の許可が必要である。多くの場合、学生は自分で WBE 実施場所を探し、始める前に許可を得なければならない。学生は自分が所属する学部のキャリアサービスオフィス、もしくは大学の Buckeye キャリアオフィスで配属先を探す支援を得ることが出来る。契約は一般的には雇用主、学生と大学の指導教官の間で締結される。この契約では経験のゴールと目的が詳述される。例えば、歴史学科では internship に向けて次のようなゴールと目的が書かれる。

- ・職場における分析、調査、コンピュータースキルの向上
- ・internship 経験と関係のある新しい調査、技術スキルの習得
- ・言葉やコミュニケーションなどの職務に関連のある能力や人間関係の発達
- ・職場における学問知識の適用
- ・歴史学部生にできる幅広い internship 経験の理解
- ・キャリア計画全体の中での internship 経験の厳密な評価

加えて、WBE を行うためには、経験を提供する学科ごとに決められたある程度の学力基準を満たしていないければならない。例えばオハイオ州立大学コミュニケーション学部では、CMM4191 や、internship、その他 cooperative education に登録するためには、以下の要件を満たしていかなければならない。

1. 大学での良い学力水準（一般的に最低でも GPA2.0）
2. オハイオ州立大学において、一般学生であり単位取得を目的としていること。
3. 経験は学生が単位申請を行った学期中に行う。既に終わった internship に対しては単位を与えられない。繰り延べ単位は認められておらず、OSU ポリシーに反する。
4. COMM4191 への登録は、学生の登録上限である 18 時間を超えてはならない。
5. 責任を持つ職務はコミュニケーション、または / も

しくは、ジャーナリズムに関するものでなければならぬ。現場での経験はコミュニケーションやジャーナリズムの講義室での授業経験を、コミュニケーション理論や実践の現実の仕事世界に拡張するものでなければならない。

6. 団体の活動やパートタイム労働（例：小売、アミューズメント労働など）は internship ではないので、internship としてカウントできない。
7. 学生には組織における専門スタッフの監督者が付く。監督者は OSU 又は他大学の学部生であってはならない。監督者は学生関係者であってはならない。
8. 学生が独立請負人として行う経験、又はそれと似た立場で行う経験である場合、単位認定はできない。

ほとんどのケースでは、単位はこれらの経験によって得られるし、経験は有給であったり無給であったりする。ほとんどの学部もまたこれらの経験に対する単位認定には要件を設けている。しかしながら、学部によって単位数は 1 から 3 と異なるし、一学期以上繰り返すこともできる。経験に必要な時間数も学部によって異なる。例えば、3 単位を歴史学部で取得するためには、学生は最低実働 60 時間を職場で行わなければならず、一方でコミュニケーション学部では 3 単位を取得するためには 150 時間の実働が必要となる。WBE 以外に必要な書類、課題、レポートの作成といった追加の課題の量も学部によって異なる。

オハイオ州立大学における WBE の活用：1 年間のスナップショット

cooperative education や internship 経験を行った学生の数に関する直近のデータは 2014 – 2015 年のものである（2014 年夏学期、2014 年秋学期、そして 2015 年春学期）。データは大学の Buckeye キャリアオフィスによって集められたものであり、これらの経験を提供している全ての学科によって実施されたデータである。

このデータには、記すべき重要なことがたくさんある。

1. 800 以上の WBE が提供され、4000 人以上の学生が参加している。（表 6）
2. ほとんどの学生は 4 年生である。（図 1）
3. ほとんどの学生がコロンバスキャンパスからの参加者であるが、これはコロンバスが最も大きなキャンパスであることから、理解しうることである。（表 10）
4. どの学期においても 90% 以上の学生が無事に経験を

成し遂げている。(表 8)

5. ほとんどの経験が夏学期に行われているが、これらの経験が「頂点」もしくはまとめの経験として設計されていることを考えると理解しうることである。そしてほとんどの学生が夏学期に卒業する。

表 6 コース登録データ (x191 で終わる分類番号を持つコース)
2014 年夏—2014 年秋—2015 年春

提供されたコース数	810
コースを修了した学生数	4061

図 1 参加者属性
学年

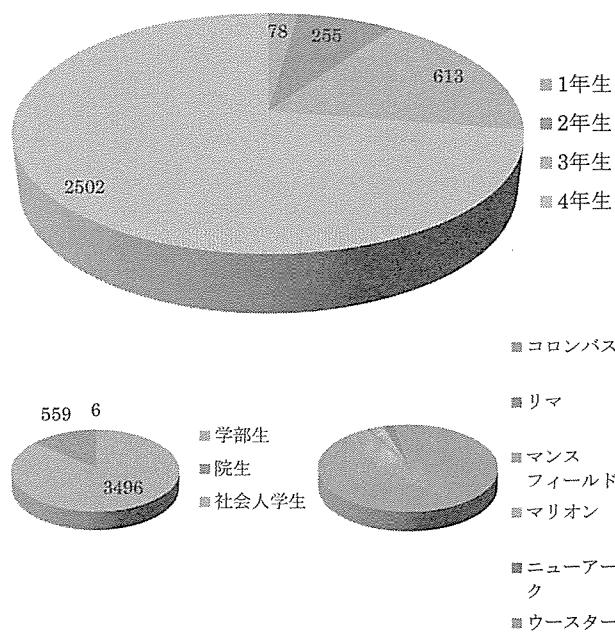


表 7 2014 年夏学期 internship コース
(191 で終わる分類番号を持つコース)

提供されたコース数	139
実施科目・領域数	82

科目 : ACCAD; AEDECON; AGRCOMM; AGSYMT; AMINSTS; ANIMSCI; ANMLTEC; ANTHROP; ART; ARTEDUC; ARTSSCI; ASAMSTS; ATMOSSC; BIOLOGY; BIOTECH; BUSADM; BUSMHR; BUSTEC; COMLDR; COMM; COMPSTD; CONSCI; CONSYSM; CRPLAN; CRPSOIL; CSE; CSTW; DANCE; DENTHYG; DESIGN; DSABLST; EARTHSC; ECON; EDUCST; EDUTL; EEOB; EHE; ENGLISH; ENGR; ENGTECH; ENR; ENTMLGY; ENVST; ESCE; ESHESA; ESSPED; ESSPSY; ESWD; FABENG; FDSCTE; FILMSTD; GEOG; GERMAN; HCS; HISTART; HISTORY; HORTTEC; INTSTD; JEWSHST; KNHES; KNPE; KNSFHP; KNSISM; LARCH; LING; MATH; MEATSCI; MUSIC; NEUROSC; NURSING; PHR; PLNTPTH; POLITSC; PSYCH; PUBAFRS; PUBHLTH; RNEWNRG; RUSSIAN; SLAVIC; SOCIO; SYLTYST; THEATRE

表 8 2014 年夏学期 internship 登録学生

学期初めの登録数	1015
コース修了者	946
離脱者	65
登録を取り下げた者	3
参加しなくなったが、取り下げなかった者 (EN)	1
成績保留 (I) 者	0

表 9 2014 年夏学期 学生プロフィール

キャリア	
学部生	831
大学院生	114
社会人学生	1
ランク	
1 年生	10
2 年生	123
3 年生	152
4 年生	544
修士候補	73
博士 / 専門家 候補	30
学部 科目履修生	2
大学院 科目履修生	12

※コースを修了した 946 をベースとしている (EN もしくは I 以外の評価を得た者)

表 10 学生の登録キャンパス

コロンバス	833
リマ	4
マンスフィールド	2
マリオン	3
ニューーアーク	1
ウースター	103

※コースを修了した 946 をベースとしている (EN もしくは I 以外の評価を得た者)

cooperative education・internship 経験に対する学生の満足度

大学が実施した直近の調査によると、オハイオ州立大学の卒業生は、学生が WBE に関与することについての興味深い統計データを明らかにしている。調査した学部(卒)生の 73 % は、学部時代に internship や cooperative education 活動に参加したことが明らかになっている一方で、大学院生がこれらの活動に参加した学生は 59 % である。興味深いことに、46 % の学

部生と48%の大学院生は、internshipやcooperative education経験を提供した雇用主の職場で仕事を得ている。明らかにオハイオ州立大学の学生は、卒業後の仕事を見つける上でこれらの経験を活用している。最後に、74.3%の学部生と、76.4%の大学院生は大学での経験は労働市場に参入する上で、準備となると感じていた。

まとめ

WBL経験の活用は、アメリカのカレッジや大学において上昇傾向にあり、オハイオ州立大学も同様である。学生、教育機関、そして雇用主が、シンプルなjob-shadowing経験やinternship、cooperative educationなど様々な形の労働経験を通じて、学生に「現実世界の」働く経験機会を提供することの価値を理解している。これらの機会を活用することは将来増えることはあっても減ることはないだろう。

References

- Cooperative Education and Internship Association. (2016). *History of cooperative education and internships*. Retrieved August 29, 2016 from <http://www.ceiainc.org/about/history/>
- Greenhouse, S. (2010, April 2). The unpaid intern, legal or not. The New York Times. Retrieved August 20, 2016 from: http://www.nytimes.com/2010/04/03/business/03intern.html?_r=0
- Husted, S., Mason, R., & Adams, E. (2003). *Cooperative occupational education*. Upper Saddle River, NJ: Pearson. <http://www.ceiainc.org/about/history/>
- Knowles, A. (1978). *Handbook of cooperative education*. San Francisco: Jossey-Bass.
- National Association of Colleges and Employers. (2016). *Position statement: U.S.internships*. Retrieved August 20, 2016 from <http://www.naceweb.org/advocacy/position-statements/united-states-internships.aspx>
- The Ohio State University. (2016). *Ohio State history and traditions*. Retrieved August 23, 2016 from <https://news.osu.edu/history.html>
- The Ohio State University (2016). *Statistical summary*. Retrieved August 18, 2016 from <https://www.osu.edu/osutoday/stuinfo.php>
- United States Department of Labor. (2016). *Apprenticeship*. Retrieved August 29, 2016 from <https://www.dol.gov/general/topic/training/apprenticeship>
- U.S. Department of Labor. (2010). *Fact sheet #71: Internship programs under The Fair Labor Standards Act*. Retrieved August 19, 2016 from <https://www.dol.gov/whdregs/compliance/whdfs71.htm>

APPENDIX A

Career Services Informational Overview Poster for The Ohio State University

